人口減少地域における「スクール・コミュニティ」の可能性

駒井　花子　　教職基盤形成コース

キーワード：地域と学校のつながり，スクール・コミュニティ，地域づくり

１．研究背景と目的

大学一年の冬に初めて天龍村を訪れて以来，この村に強く惹かれた私は，その後何度も足を運び，さらに大学３年次には１年間休学し，天龍村の「地域おこし協力隊」として活動した。この村で出会う人や，その豊かなつながりの世界が私にとっては新鮮であり，感動的であった。ここでは地域の子どもは「村の宝」として地域で見守り・育てる。運動会や文化祭等の行事や教科等の学習活動を通した地域の人たちとの関わりの中で子どもたちは多くのことを学ぶ。そこで生き生きと学ぶ子どもたちの姿がとても印象的なのである。

その一方，人口減少地域では十分な教育環境を維持することが難しい現実がある。天龍村でも，このまま子どもの数が増えなければ令和５年度には中学校の入学生が０人になる。少子化に伴う学級減により教員配置数も減らされるため，村費で教員を雇ってなんとか人的環境を維持している状況である。少人数であることにより，大規模校のようにはできないこともあるが，少人数ならではの学校のあり方，学びのあり方，地域とのつながりが確かにある。天龍村の自然の中で様々な生き方や価値観を持って生き生きと暮らす大人たちがいる。そうした地域の人たちとの日常的な関わり合いの中で，一人一人が自分らしく学んでいくことも，この村だからこそ可能であると感じている。

そこで，学校づくりを地域づくりの視点で考えていく「スクール・コミュニティ」の発想を取り入れることで，この人口減少社会における地域の課題に応える知見が見いだされるのではないかと考えた。本研究では，人口減少地域において学校が「スクール・コミュニティ」の核として機能していくための条件を明らかにすることを目的とする。

２．研究の方法

2.1 人口減少地域でのフィールドワーク

(1)天龍小学校でのフィールドワーク

令和元年９月～10 月にかけて，ブッポウソウ保護活動の取り組みに参画し，また９月には植樹体験に参画した。令和２年８月～11 月の期間には，全学年で取り組む書写教室，5・6 年対象の間伐体験，3 年生対象の地域学習に参画した。

(2)大町市立美麻小中学校でのフィールドワーク

令和元年 12 月 6 日（金）に同校にて，総合的な学習の時間のなかの「夢の時間」の発表会を参観した。さらに，美麻地区の学校支援コーディネーター前川浩一氏から美麻小中学校における地域づくり会議の活動についての説明を受け，対談を行った。

2.2 聴き取り調査

(1) 調査の目的

スクール・コミュニティの実現にむけて，教職員や地域住民はこの発想をどう受け止めるか，また実現させていく上での課題をどのように考えるのかを明らかにすること。

(2) 調査の方法

実施期間：令和 2 年 9 月 16 日～9 月 23 日 / 令和 2 年 12 月 7 日～12 月 23 日

対象：天龍村立天龍小学校教職員 11 名全員 / 天龍村地域住民 10 名

方法：以下の項目を主な質問とする半構造型の聴き取り調査とし，IC レコーダーで録音して記録を残し，会話記録を手作業で分析した。

＜質問内容＞

・天龍村で（教員）生活を送る中で，地域の現状や課題についてどのように感じているか

・スクール・コミュニティという発想についてどう考えるか。

2.3 文献調査

学校と地域との関係のあり方を論じた先行研究を，「コミュニティ・スクール」「スクール・コミュニティ」をキーワードとして文献研究を行った。

３．研究の概要

3.1　スクール・コミュニティという発想

(1) スクール・コミュニティとは

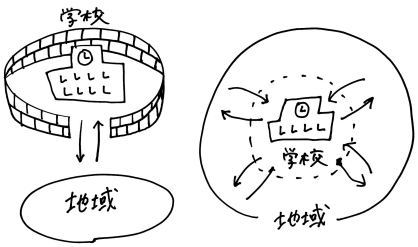

図 1 コミュニティ・スクール(左)とスクール・コミュニティ

コミュニティ・スクールが地域の支援のもと「学校づくり」を進めていくのに対して，スクール・コミュニティは学校を核とした「地域づくり」の発想をいう（図１）。地域の人たちを「得意や特技を持つ住民のみに「支援」してもらう「人材」」（岸，2019，p. 20）としてとらえるのではなく，学校を地域の一部とした上で，「学校「も」地域「も」ともにメリットを生み WIN&WIN する，真の協働」（岸，2019，p. 13）により，地域がつくられていくのだという。また子どもたちの学びの視点に立つと，地域を学ぶことは，「地域を知ることが最終目的なのではなく，地域を理解することを通して，社会のシステムや自分の生き方を考えるきっかけ」（伏木，2019，p.8）にもなりうるのだという。子どもたちにとっても，地域まるごとが学校なのである。

(2) 学校と地域との関係性（フィールドワークからわかったこと）

天龍村は人口減少地域であるからこそ，地域と学校の結びつきはとても強く，天龍村ならではの地域に根ざした教育が多く展開されていた。しかしその課題として，例えばブッポウソウの保護活動などは，その内容のほとんどが毎年同じ時期・同じ内容で，同じ地域

の方に声がかかるという，固定化・慣習化された関係を柔軟に編み直すことの難しさがある。その時々の子どもの個性的な思いや教員個人のこだわり等を学習活動に反映させることが制限され，オリジナルな実践の創出を阻んでしまう面もある。

また，美麻小中学校でのフィールドワークで筆者が総合的な学習の時間を参観した際には，教員と地域の方の見分けがつかないほど，両者が同じ目線に立って子どもたち一人一人の追求活動を見守る姿が見られた。

「地域が学校を支援する」という従来の関係性を，地域住民と学校関係者双方が主体性をもち，共に学び合い・高め合う関係へと転換していく必要性が確認された。

さらに，地域と学校が関わる「目的」が，これからの地域を担う子どもたちを育てること，すなわち地域自体を育てることである，という共通理解をもち，保護者，学校だけでなく，地域全体で子どもたちの学びや学校のあり方を考えていくことが必要であることが示唆された。

3.2 聴き取り調査結果の概要

表 1　聴き取り調査結果の主な内容

	スクール・コミュニティという発想	スクール・コミュニティに向けた課題
教職員	大半の教職員がスクール・コミュニティという発想にポジティブな印象を持っていた。例えば，「子どもたちが天龍村を離れていってしまうのは寂しい。一度村を離れたとしても，また戻ってきたいと思えるような子になってほしいと願うし，そういう意味で地域を深く知れる授業はとても大切だと思う。」という声が聴かれた。	・地域のお年寄りが坂の上にある天龍小学校まで登ってくる交通手段がない。 ・地域の人の「学校に関わりたい」というニーズがあるのか知りたい。 ・学校内に自由に人が出入りできるようにする場合，防犯面を考える必要はないのか。 ・地域と学校の間に入ってくれるコーディネーターが必要になる。
地域住民	スクール・コミュニティという発想にポジティブな印象を持っていた。例えば，「天龍小学校は地域に開かれた学校だと思うが，学校の車輪だけでは進んでいかない。地域も一緒になって車輪を回していかなければいけない。地域と学校の両輪が回って初めてスクール・コミュニティになる。」という意見があった。	・最初の一歩を踏み出すこと，そしてそれを継続すること，この二つが最も難しく，最も重要である。 ・キーパーソン＝「理念・決断力・行動力・情熱」をもった人が必要である。 ・思い（目指す子ども像）を地域と学校双方で共有することや，地域と学校が本音を言い合える関係になることが重要である。

今回の聴き取り調査の結果から主な内容をまとめた（表 1）。スクール・コミュニティという発想の土台となる意識が，既に村で暮らす先生方の中に確認された。スクール・コミュニティが，これまでに全くなかった発想なのではなく，天龍村でこれまでに取り組んできた地域と学校の協働による学校づくりの延長にあるものと位置づけられる。

また今回の調査で挙がった「交通手段がない」という課題は，校舎内に留まらず，地域全体を学びのフィールドに広げて考え，地域住民のもとへ子どもたちが出向くことで解決できる。防犯面については，地域住民が出入りすることでむしろ子どもを見守る目が増え，安全面が強化されるような仕組みをつくることで解決できる。

青木（2019）は地域とともにある学校づくりに取り組み，成果をあげている全国各地域での共通の要因として，「地域コーディネーター」の存在を挙げている。天龍村でも，地域と学校をつなぐキーパーソン（＝地域コーディネーター）の必要性を学校関係者及び地域住民双方が重要視していた。地域や学校の抱える課題やニーズによって，「地域と学校をつなぐ」方法は様々であり，地域コーディネーターが双方の主体性を発揮させるような係わりを様々に工夫することが求められよう。

４．本研究で明らかになったことと今後の課題

本研究では，「スクール・コミュニティ」の発想に立って，人口減少地域において学校が地域づくりの核となるための条件を明らかにすることを目的とした。

第一に，地域住民と学校関係者双方が目的意識を共有し，その目的に向かって主体的に関わりあうことが必要である。スクール・コミュニティは，学校を「核」とした地域づくりの発想であるが，学校は地域の一部であり，地域全体で人々が学ぶ場を創っていくことが求められる。学校関係者も含めた「地域全体」で学校を「プラットフォーム」にした地域づくりを進めていくことが重要である。

第二に，学びの場を学校の敷地に限定せず，地域全体をフィールドにすることである。学校が「地域に暮らす大人も子どもも誰もが自然に関わり合える地域のコミュニティのひとつ」になるためには，その学びのフィールドを地域全体に広げ，地域のあらゆる場所で関わり合いが生まれるような関係を生み出すことが理想である。

第三に，地域と学校をつなぐキーパーソンの役割が重要である。その求められる資質について，今回の研究を通して明らかになったことは，人々の思いに寄り添うことの大切さである。スクール・コミュニティがいかに理想的であっても，それを外から押し付けるのではなく，その人の内にある地域への思いに寄り添い，そこから一緒に地域の「これから」を考えていくことが大切であることを実感した。

本研究で明らかにできたのは，学校が地域づくりの核となるための条件のごく一部にすぎない。しかし，この研究を通して，これまで漠然と抱いていた「天龍村をもっと良くしたい」という思いが，「地域と学校の架け橋となるような存在になりたい」という具体的な目標へと変わった。今後はその目標に向けて，また天龍村での「スクール・コミュニティ」の実現に向けて，学びを深めて実践を重ねていきたい。

文　献

- 岸裕司(2019)．市民立学校としてのスクール・コミュニティの秋津モデル．*信濃教育,* 第 1592 号.
- 伏木久始(2019)．新たな時代の学校と地域との協働．*信濃教育,* 第 1592 号
- 前川浩一・青木一(2019)．コミュニティ・スクールを持続可能にする地域コーディネーターのキックオフ．三恵社